

ペルシア語



海外交流

森 茂 男*

The Persian Language
Key Words : Persian Iran Arabic

ペルシア語は現代イランの国語であることはよく知られています。しかし、ペルシア語が用いられている地域はイランだけではありません。タージキスタンの国語であるタージーク語、アフガニスタンの主要言語であるダリー語もペルシア語の方言ですし、中央アジアの外の地域、コーカサス地方のグルジア、パキスタンの一部などでも使われています。ペルシア語はイスラーム圏においてアラビア語に次いで重要な言語であったし、このことは今も変わらないと言えます。

ペルシア語の教育と研究は関西では戦前から行われていました。

大阪外国語学校（大阪大学外国語学部の前身）の印度語部では大正14年にペルシア語が研修語として開講され、昭和24年には研究科目となっています。作家の陳舜臣氏は印度語部を卒業後、同科の助手として古典ペルシア文学の研究に従事し、オマル・ハイヤームの四行詩集『ルバイヤート』を翻訳されています。また、印度語部で長年研究と教育に従事されてきた澤英三先生は古典ペルシア文学の研究者としても有名で、岩波文庫からサァディー『ゴレスターン』の翻訳を出されています。京都大学では主として梵語学梵文学講座において古代イランの言語文学の研究が行われていました。東洋史講座では伝統的に西アジア史の研究が盛んで、後に西南アジア史

講座の設置へとつながります。そのなかでもイラン史は中心的な研究分野として、多くのイラン史研究者を輩出しています。

こうした土壌のうえに1961年（昭和36年）、大阪外国語大学にペルシア語学科が設置されました。設置当初、ペルシア語の教育はインド語学科の山本健太郎先生や加賀谷寛先生らによって行われていましたが、ほどなく勝藤猛先生、井本英一先生が着任され、後には岡崎正考先生が加わって日本人教員三名、外国人教員一名の体制が整い、今日に至っています。現在は森茂男（ペルシア語学）、藤元優子（ペルシア文学）、竹原新（イラン伝承文化学）、アーベディーシャール、カームヤール（現代文学）の体制で研究・教育に従事しています。また、関西イラン研究会という研究会を組織して、3ヶ月に一度研究発表会を開催しています。年に一度大阪大学言語文化研究科言語社会専攻の紀要として雑誌『イラン研究』（250～300頁）を刊行し、平成23年度現在7号を迎えています。関西におけるイラン研究の中心としての役割を担っていると自負する次第です。

さて、ペルシア語はアラビア文字のアルファベットを採用し、それにペルシア語にあったアラビア語にない音韻を表記するためにいくつかの新しい文字が付け加えられています。たとえば、/p/を表す پ<pe> という文字、/ž/の ژ<že>、/č/の چ<če>、/g/の گ<gāh>などの文字がそれにあたります。これらの文字は、ペルシア語がアラビア文字で書かれた西暦9世紀頃にはまだ存在していませんでした。当初、アラビア語にない音韻は近似的なアラビア文字で表記されました。たとえば、Pārsī「ペルシア語」という語を表記するのにアラビア文字では /p/に近い /f/の文字 (ف<fe>) を用いて فارسى (Fārsī) と表記されていました。この表記は現代語のファールスィーという語形に名残をとどめていま



* Shigeo MORI

1948年8月生
京都大学大学院（1979年）
現在、大阪大学 言語文化研究科言語社会専攻 教授 修士 イラン学
TEL：072-730-5308
FAX：072-730-5308
E-mail：morishi@lang.osaka-u.ac.jp

す。しかし、ペルシア語の表記としてはきわめて不便であるため、西暦12世紀頃には新しい پ<pe> という文字が創案されていたと思われます。ほかの新しい文字もその頃には創案されていました。ただし、/g/を表す گ<gāh>にいたっては20世紀に入っても標準化されず一部には گ という文字が使われたりしていました。

アラビア語の影響は文字だけに留まりません。大量のアラビア語がペルシア語に借用されました。もはや、アラビア語なくしてはペルシア語の表現が不可能なほどになっています。たとえば、「こんにちは」を意味する salām aleikom はアラビア語の表現そのままですし、「有り難う」の moteshakker, tashakkor も同様です。別れの挨拶「さようなら」は khodā-hāfez といいますが、これはペルシア語 khodā「神」とアラビア語 hāfez「加護」の混成語です。現象としては日本語の「加護あれかし」と似ていなくもありません。「書物」は古くは nāme という語が用いられていましたが、これは現代語では「手紙」の意味に後退し、もっぱら ketāb というアラビア語が「本」の意味で使われています。ちょうど、日本語の和語「ふみ(文)」が「書物」の意味から後退して「手紙」の意味になり、代わりに漢語の「本・書」が使われているのと事情は似ています。このようにアラビア語はペルシア語の隅々まで浸透しています。したがってペルシア語におけるアラビア語語彙の重要性は、英語におけるラテン語や日本語における漢語のそれと並行したものといえます。

このようにアラビア語がペルシア語に借用されたのはイランがイスラーム化された西暦7世紀後半以降のことです。このことから分かるように、ペルシア語とアラビア語との間に親縁関係はありません。ペルシア語はインド・ヨーロッパ語族に属する言語ですから、いろいろな点でヨーロッパ諸語と共通点を持っています。たとえば、barādar「兄弟」、mādar「母」、pedar「父」、dokhtar「娘」はそれぞれ英語の brother, mother, father, daughter と語源が共通しています。連結動詞(英語の be に相当)の3人称単数現在形は ast といいますが、これは英語 is, フランス語 est, ラテン語 est, ドイツ語 ist と共通しています。

ペルシア語の語順は SOV 型だといわれます。たとえば, Dārā rāz dārad は日本語と同じように読み

下して「ダーラーは秘密(rāz)持っている(dārad)」というように言います。ただし、「・・・であると言う」という文は日本語とは異なり, S+V+ke... (ke... は英語の that 説に相当) という構文を取ります。例: shomā (S「あなた」) goftid (V「言った」) ke (~ということ=that) Ali (S) dāneshju (C) ast (V) (あなたは、アリーは学生であると言った)。単文は SOV 型をとり、名詞節を伴う文が SVthat... 型になるのはラテン語と共通しています。このことからペルシア語の語順は基本的にはインド・ヨーロッパ語族的だと言えます。

ペルシア語文法の大きい特徴で、英語などと異なる点に冠詞のないことが挙げられます。前に挙げた例文で「秘密」の名詞 rāz や「学生」の dāneshju には冠詞が付いていません。しかし、冠詞はラテン語にもサンスクリット語にもロシア語にもありませんから、ペルシア語特有の現象と見ることはできません。

このようなペルシア語を表記するのにイラン人は伝統的にセム語族の文字体系を借用してきました。古期ペルシア語では、アッカド語などを表記する楔形文字を利用して独自の文字体系が創案されました。中期ペルシア語(別名パフラヴィー語)はアラム語のアルファベットを借用したものです。そして、近期ペルシア語(現代ペルシア語)はアラビア語の文字体系を使って表記しています。このとき、大きい問題が生じます。アラビア語の文章語は原則として母音は a, i, u の3つしかありません。しかし、アラビア語は複雑ではあっても、論理的な文法体系によって母音の使い方は規則的に分かるようになっています。したがって、アラビア語は基本的には子音文字しかありませんが、それで不便を感じることもあまりありません。ところが、ペルシア語は ā, a, i, u, e, o という6つの母音があります。そのうえ、母音の使い方にルールはありません。例を挙げましょう。سر という単語は sr という子音しか表していません。これに母音をつけると sar「頭」、ser「麻痺した」、serr「秘密」、sor「滑ること」という4種類の読み方が可能です。すべて意味が異なりますから、どの母音を取るかは一つ一つ覚えなければなりません。習うより慣れる、で実際には学習の過程であまり深刻な問題ではなくなります。でも、辞書で確認しなければならない場に遭遇する時が少なく

ないのも事実です。

昨今、イランはマスコミの国際面を賑わしていますが、ペルシア語が西アジアにおいて重要な言語であることに変わりはありません。

最後にペルシア語で書かれたコーランの注釈書写本からその一頁を紹介しておきます。『聖コーラン

の注釈』というテキストで、書かれたのは西暦 11 世紀前半です。大きい文字で書かれているのがアラビア語で、コーランの一部です。小さい文字で書かれたのがペルシア語による注釈です。このコラムで以前に紹介されたアラビア語のコーランの出だしと比較されるのも一興でしょう。

بَلِّغُوا لَهُمْ فِي عَمْرِئِهِمْ هَذَا بَلِّغُوا لَهُمْ هَذَا بَلِّغُوا لَهُمْ هَذَا
 اِنْ قَدْ وَكَفْتُمْ اَنْ تَعْمَلُوا سَابِقًا وَكَفْتُمْ اَنْ تَعْمَلُوا سَابِقًا وَكَفْتُمْ اَنْ تَعْمَلُوا سَابِقًا
 اِنْ قَدْ وَكَفْتُمْ اَنْ تَعْمَلُوا سَابِقًا وَكَفْتُمْ اَنْ تَعْمَلُوا سَابِقًا وَكَفْتُمْ اَنْ تَعْمَلُوا سَابِقًا
 وَهُمْ اَعْمَالُكُمْ دُونَ ذَلِكَ هُمْ لَهَا عَامِلُونَ
 وَاَيْتَانِ لَكَ اَمْ لَا تَعْلَمُ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ
 حِينَ مَعَايِ سَبَاتٍ حَتَّى اِذَا اخَذْنَا مَثَرًا فِيهِمْ بِالْعَذَابِ
 بِكَ ذَا اَيْتَانِ اِنَّا اَنْكَرُ كَيْفَ كَرِهْتُمْ مَا كَرِهْتُمْ اِنَّا اَيْتَانِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ
 عَذَابٍ بَدْرًا اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ
 اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ
 كَيْفَ مَعَايِ سَبَاتٍ حَتَّى اِذَا اخَذْنَا مَثَرًا فِيهِمْ بِالْعَذَابِ اِنْ هَذِهِ اَيُّهَا السَّابِقَانِ

